

村山市長、「頸北斎場を残すことを前提にして新上越斎場を建設」と明言 オスプレイ参加の日米共同訓練、新斎場建設などで論陣

私は3月22日、市議会で一般質問をしました。今回は関山演習場での日米共同訓練、新斎場建設問題などをとりあげました。以下は、私と市長や関係部長とのやりとりの大要です。

世論を無視した日米共同訓練強行に抗議を

【橋爪】今回の日米共同訓練、オスプレイの沖縄での事故以来、初めての訓練だった。昨日、私は絵手紙教室をやっておられる女性から絵手紙をもらったが、「怖かった。音や振動すごかった」とある。多くの市民は同じ思いだったのではないか。

【市長】市民の不安も大きく、市

民生活への影響がこれまで以上に懸念されることから、関係機関に対し強く働きかけてきた。

【橋爪】市長は妙高市などと連携し、安全対策や最大限の情報提供などの要望を3度行つたが、最大限の情報提供を受けたか。

【総務管理部長】今回は航空機中心の訓練だった。もう少し情報提供していただきたかった。

【橋爪】情報は、もつといっぱい出してもらわないと困る。いきなり飛んできて、市街地でも低空飛行をやる、とんでもないことだ。

【橋爪】長野市議会は昨日、全会一致で意見書採択した。そこに「安全性の確保が不十分なままで飛行訓練が行われたことは、誠に遺憾」と書いてある。市長もこう

いう態度表明をすべきだ。

【市長】今回の訓練で市民が不安に思ったことなどを整理しながら、次期訓練があるときは、そこ

うしたことを付け加えながら、要望を行っていかうと思つている。

3月2日の新斎場建設方針で質問展開

設方針で質問展開

【橋爪】新斎場建設事業については頸北斎場の今後のあり方と切り離すなどといった新方針が示された。上越斎場は更新時期を迎えていると判断されたのか。

【健康福祉部長】その通りだ。

【橋爪】何をもつて更新時期を迎えたかと判断されたか。そして判断されたのは誰か。

【健康福祉部長】この間、新上越斎場整備については合併特例債を使いたいという思いがあり、そのためには施設の統廃合、頸北斎場の（廃止）とセットと考えてきた。その考え方については健康づくり推進課の方で原案をつくり、庁内の政策監会議に諮り、最終的には市長と協議し、整理した。老朽化については今後、火葬炉の入れ替えなどが見込まれるので、この有利な財源を使える間という思いが先行した。

【橋爪】何をもつて更新時期を迎えたかと訊いている。いま一度答えてほしい。

【健康福祉部長】平成27年度だったと思うが、新上越斎場建設にあ



【ネコヤナギ】ヤナギ科の落葉低木。漢字で「猫柳」と書きます。春を告げる花の一つ。今号の「春よ来い」に書いた花そのものです。川辺というよりも川の中で咲いていました。19日、吉川区尾神（蛸場）で撮影。

たつての調査を外部に委託した。その報告書からも判断した。

【橋爪】上越斎場（の報告書）のような判断、同じような基準でみた場合、頸北斎場はあと何年もつと考えているのか。

【健康福祉部長】何年もつかはにわかには答えられないが、団塊の世代が亡くなられるピークも踏まえ、検討していきたい。

【橋爪】新斎場については十分時間をかけて検討することだが、いま少し具体的にのべてほしい。

【市長】地域に（昨年当初方針を）話したところ異論が出て、昨年末には新斎場と頸北斎場のあり方は切り離すべきだと指示をした。そのなかで、3月2日に新方針をお伝えした。（新上越斎場に、関しては）このことをやめて、こつちで効率的にという話はまったくくない。頸北斎場を残しながら新しい斎場をきちつと考えることにしようとして整理した。新斎場をどう造っていくかというときに、頸北斎場があることを前提にすれば、火葬炉は何基必要なのか、将来の見込みをどうするか、専門家の知見も入れて考えていきたい。



No.1800 2017.3.26
 発行・編集 日本共産党上越市議 橋爪のりかず
 Tel 025-548-3628
 通じないときは 090-5392-1961
 E-mail hasiznyg@ruby.ocn.ne.jp
 URL <http://www.hose1.jp/>

ブログ
 「ホーセの見
 てある記」は
 ← こちら

橋爪法一 検索

春よ来い

第四八回

ネコヤナギ

三月の中旬の土曜日のこと、吉川区東田中地内を軽乗用車で通行中、対向車がライトを点けて私に合図を送ってきました。大瀧区に住む弟です。白い軽トラックでしたので、すぐにわかりました。

車を止めると、弟がニコニコしながら私のそばまでやってきました。「いま、蛍場まで行ってきたが」と言いながら、私に見せてくれたのはネコヤナギでした。

まだ、雪があるはずなのに、弟はわざわざ蛍場までとりに行ってきたのです。絵を描くことが好きな弟のことですから、たぶん、ネコのしっぽのような花穂のついた枝を持ち帰って、精細に描写したいと思ったのでしょう。

私はネコヤナギの一枝を手にした瞬間、「ああ、これは蛍場のネコヤナギだ」と思いました。緑色の細い木の枝、白っぽくて、矢じりのように見える花穂（かすい）、子どもの頃からずっと見続けてきたネコヤナギそのものでした。かつこよくて、「これがおらつたりりのネコヤナギだ」と自慢したくなります。

私が子ども時代を過ごした吉川区の蛍場では、わが家の下の方に吉川の支流、釜平川が流れていました。その川辺にネコヤナギが何本かあったのです。

私にとってネコヤナギは、春を告げる木であり、花でした。三月になって雪解けが始まると、私はその川辺まで何回も下りていき、ネコヤナギの花のふくらみ具合はどうかとか、芽鱗（がりん）という花をおおっている皮がどこまではがれてきたかなどを観察したものです。

さて、弟と出会った翌日の朝、私は尾神のジュンサクさんの家に行った帰りに、蛍場まで下りました。いうまでもなく、ネコヤナギを三十数年ぶりに見てみたくなった

のです。

わが家の墓がある釜平（がまびろ）の入り口で車を降り、雪の上を歩きました。積雪はまだ一歩近くありました。今年はいつよりも雪はしまつていません。何度も雪に埋まりながら、五、六分かけてネコヤナギがあった場所まで下りました。

ところが、かつてネコヤナギを見かけた川のカーブのところにはネコヤナギの木も花も見当たりません。あつたのはタニウツギの木だけでした。困って、弟に電話をかけて場所を確認すると、「そこにはもうないよ。大東（屋号）の下の方だよ」という答えが返ってきました。

再び雪の上を歩いて一〇〇メートルほど下流へ行きました。かつて丸木橋があつた場所まで下りて下流方向を見たら、二〇メートル先の川の中にネコヤナギらしきものが見えます。私はカメラを回しながら、土手伝いにそこまで行きました。

ありました、ありました。間違いなく、子どもの頃からずっと見てきたネコヤナギです。勢いよく流れる水に揺られながら、銀白の花が輝いていました。花に触るとネコのしっぽのようなすべすべ感があります。親指と人差し指で挟むとネコのしっぽの骨にあつた感じもします。三十数年ぶりに釜平川でネコヤナギに出合つた私は、懐かしい気持ちでいっぱいになりました。

ネコヤナギの花言葉は「自由」。長い冬が終わる頃、春の開放感を感じさせてくれるこの花にぴったりな言葉です。そう言えれば、かつてネコヤナギがあつた場所のすぐ上にわが家の小さな田んぼがありました。そこは雪消えが早く、私は田んぼの土を掘り返しては「ドジョウつかめ」をしたものです。思えば、ネコヤナギ観察も「ドジョウつかめ」も開放感たつぷりでしたね。

上越市も新入学準備金の入学前支給を検討



上越地域各消防署における空間放射線量測定結果

測定は毎日午前9時。数値はマイクロシーベルト。1時間当たりの測定量です。消防署によると、通常は1時間当たり0.016~0.16μSv(マイクロシーベルト)だとのこと。

	3月15日(水)	3月22日(水)
上越南消防署	0.057	0.040
上越北消防署	0.050	0.050
新井消防署	0.047	0.047
頸北消防署	0.047	0.043
頸南消防署	0.053	0.053
東頸消防署	0.060	0.060
高士分遣所	0.057	0.060
名立分遣所	0.053	0.050

上越市教育委員会の中野教育長は21日の市議会本会議で、経済的な困難を抱えている家庭の小中学生が受けている就学援助制度について言及し、新入学準備金の入学前支給について検討していることを明らかにしました。これは、日本共産党議員団の上野公悦議員の質問に答えたものです。

中野教育長は、「新入学学用品費の支給時期については、保護者が必要とする時期に支給することで制度の目的である負担の解消につながる」とのべたうえで、「入学前に入

学準備金を支給するには、現制度において支給対象者を未就学児童及び小学6年生に規則を変更するか、入学準備金の支給を目的とした新たな制度の創設が必要」「まずは現行制度を基本とするが、課題については引き続き内部で検討を進めてまいります」と答えました。

全国では、すでに156の市区町村で入学前支給を実施しています。こうした動きを受けて、文部科学省も最近、検討に入ったといいます。上越市でも早く実現するといひです。

先日、柿崎区に住む女性の方から電話をいただきました。私の活動レポートを読んで何か心に残るものがあったようです。「財政的に厳しいもので、ひと月に1回くらいしか新聞折り込みで

きなくて申し訳ありません」と謝ると、「その1回であっても楽しみにしています」という言葉を返してくださいました。そんなふうには言ってもらえるなんてうれしい限りです。私の活動レポートは

1985年(昭和65)から毎週発行を続け、今号で1800号に到達しました。ご支援くださいました皆さんに心から御礼申し上げます。次は1900号をめざして書き続けます。引き続きご支援を!